手塚治虫が想い描く阪急沿線の風景

★『ブラック・ジャック』『どついたれ』『アドルフに告ぐ』『紙の砦』★

☆手塚治虫が25歳まで過ごした阪急宝塚沿線☆

阪急文化と手塚治虫

田浦 紀子

TAURA noriko

1978 年大阪市生まれ。京都精華大学芸術学部卒業。在学時代に阪神間の手塚治虫ゆかりの地を記した研究誌「虫マップ」を発表。改訂を重ねながら様々な媒体で発信し続け現在に至る。近年は大阪を中心に、手塚治虫ゆかりの地をめぐるまち歩きツアーやイベントを主宰。

２０１５年９月５日、12日と二週にわたってＮＨＫ放送90年ドラマ「経世済民の男小林一三」が放送されました。「経世済民」とは、中国の古典に因む言葉で、「世を経(おさ)め、民を濟（すく）う」の意味で「経済」の語源だそうです。阪神間の一大文化圏を築いた阪急電鉄の創始者・小林一三の生涯を描いたこのドラマ。この作品自体は手塚治虫と直接的な関連はないものの、手塚治虫の人生やその作品は、阪急文化の影響なしには語れないものがあるということで、今回は「阪急文化と手塚治虫」について書きたいと思います。

◎阪急の創始者・小林一三

小林一三は、明治６（１８７３）年1月3日、山梨県に生まれました。阪急電鉄・宝塚歌劇団・阪急百貨店・東宝をはじめとする阪急東宝グループの創業者です。鉄道を起点とした都市開発に成功。手塚治虫が幼少期を過ごした阪急宝塚線の沿線開発に尽力しました。ちなみに、手塚治虫が通った池田師範附属小学校の跡地には、現在、阪急関連の歴史資料を集めた「池田文庫」が建っています。

明治43（１９１０）年、小林一三は阪急電鉄の前身となる「箕面有馬電気軌道」を開業。大正から昭和初期にかけての大阪は「大大阪」と呼ばれ、東京を抜いて日本第一の都市に成長しました。小林一三の事業の成功を支えたのは、「こういう暮らしをしたい」という庶民の夢を的確にとらえる力。「煙の都」と言われた大阪市内から、緑豊かな郊外住宅での生活を謳った鉄道事業モデルを展開していきました。そして、宝塚、神戸、京都と沿線拡大していく起点となったのが、大阪の梅田駅でした。

宝塚の花の道にある小林一三像

◎大阪梅田の阪急ビルディング

大阪梅田の阪急ビルディングは、昭和４（１９２９）年、世界初のターミナルデパート（鉄道駅を併設した百貨店）として誕生。地上８階地下２階建のビルで、当初は阪急のマルーンカラーに近い濃紫褐色のタイルが外観に使用されていました。その後、次々に増改築を繰り返して店舗面積を拡大。戦後、外観はクリーム色のタイルに張り替えられました。

昭和５（１９３０）年、旧本社（旧阪急マーケット）ビルを解体撤去し、第二期の増築工事に着手。翌６（１９３１）年に工事が完成。この阪急ビルの第二期増築工事で誕生したのが、アーチ型天井にシャンデリアが灯る優美な空間「梅田駅コンコース」です。昭和47（１９７２）年に阪急梅田駅がＪＲの北側に移転するまでは、阪急ビル１階が阪急電車の乗降場でした。旧阪急梅田駅コンコースは２００５年に解体。現在は、シャンデリアと伊東忠太が意匠を手がけた東西の壁画が、阪急百貨店13階のレストラン「シャンデリアテーブル」に移設され、その空間を再現しています。

コンコースの東西の壁画には、中国神話の四神（青龍・朱雀・白虎・玄武）が配される予定でしたが、玄武は亀であることから、電鉄会社のモチーフとしてはふさわしくないということで、代わりにギリシア神

阪急ビル全景（２００５年）：
（阪神百貨店歩道橋・南西方向より）
タイルの色が竣工当時と異なる

阪急ビル１・２期全景（昭和６年）
（「建築と社会」第15巻第２号　昭和７年より）
濃紫褐色のタイルが外観に使用されていた

旧阪急梅田駅コンコース
（２００５年）

シャンデリアテーブル
（２０１２年～）

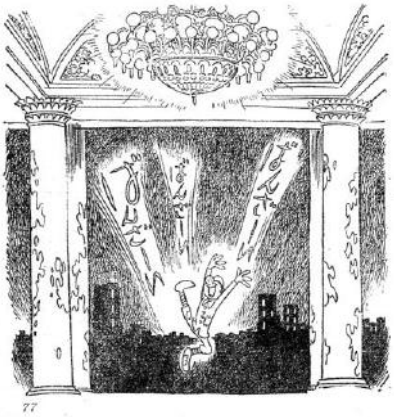
話よりペガサスが加えられました。「阪急電車の快速と威力」を象徴するものとして、龍・鳳凰・獅子・天馬がガラスモザイクで描かれています。また、壁画中央の「太陽に住むヤタガラス(三本足のカラス)」と「月に住む兎」は、「阪急電車の日夜の運行」を意味します。

◎手塚作品に描かれた阪急ビルディング

関西で25年間を過ごし、大学時代は毎日、自宅の宝塚ら大阪まで阪急宝塚線で通学していた手塚治虫にとって、阪急梅田駅近辺はよほど思い出深い場所だったのでしょう。『ブラック・ジャック』『どついたれ』『アドルフに告ぐ』『紙の砦』その他エッセイなど、作中に何度もします。中でも、自伝的漫画『紙の砦』のラストシーンは、昭和20（1945）年8月15日の夜、「大阪の街の灯り」を見て平和を実感したエピソードとして有名です。同様のエピソードがエッセイ等で語られていますが、その場所が「阪急百貨店」とはっきり書かれているのが『COM』に連載された「ぼくのまんが記」です。

ぼくはその夜、自宅の宝塚から、阪急電車に乗って、大阪へでていった。車内はガランとして幽霊電車のようにさみしかった。「あっ、大阪の町に灯りがついている！」ぼくは目を見はった。阪急百貨店のシャンデリアが目もくらむばかりに輝いている。何年ぶりだろう！灯りがついたのは。「ああ、ぼくは生き残ったんだ。幸福だ」これが平和というものなんだ！

（『COM』1968年1月号収録「ぼくのまんが記　戦後児童まんが史1」より）



©手塚プロダクション

竣工当時の阪急梅田駅コンコース
（「建築と社会」第15巻第2号　昭和7年より）

©手塚プロダクション

伴俊男 著『手塚治虫物語』より
梅田駅コンコースの初代シャンデリアが描かれている。

手塚先生の元アシスタントの伴俊男さんが1989年～92年に「アサヒグラフ」に連載した『手塚治虫物語』には、阪急梅田駅コンコースに輝く初代シャンデリアが史料に忠実に描かれています。

ところが、終戦直後の昭和21（1946）年に、靴磨きの少年が集まる梅田駅を映した朝日新聞社の写真を見ると、終戦時の梅田駅にはシャンデリアが存在しなかったことがわかります。阪急の社史によると、戦時中は金属回収令によりシャンデリアは供出させられていたそうです。したがって、手塚治虫が灯火管制が解かれた後に見た「灯り」はシャンデリアではなく、小ぶりの照明であったものと推測されます。

靴磨きの少年が集まる昭和21年の梅田駅
（朝日新聞社）シャンデリアは撤去され、傘ランプのような小ぶりの照明器具が取り付けられている。

ちなみに講談社手塚治虫漫画全集『手塚治虫講演集』などに、同様のエピソードと共にこの絵が掲載されていますが、初出は1968年の『COM』であるため、現在、阪急百貨店で保存されているシャンデリアとは時期が異なり、直接的なモデルではありません。『COM』連載当時の阪急百貨店に存在したのは、梅田駅移転の1972年まで存在した二代目シャンデリアですが、描かれた絵とまったく形状が異なるため、写真資料などは一切参考にせずに描いた絵と思われます。現在、阪急百貨店に保存されているシャンデリアは、梅田駅の移転に伴う阪急の第8期工事完了後の1972年、百貨店のグランドオープンの際、「ブロンズ

「阪急沿線」No. 19（1977年5月発行）表紙
写真の説明はなかったが、発行年より10年以上前に撮影された写真と推察。戦後の二代目シャンデリアが映っている。

大時計」と共に披露されました。

◎村野藤吾の梅田吸気塔

ステンレス板で囲まれた不思議なオブジェが御堂筋の北端の阪急百貨店前に存在します。１９６３年、建築家・村野藤吾によって設計された梅田吸気塔。再開発著しい梅田の中にあって、このオブジェだけが約半世紀の時を刻み続けています。

阪急百貨店建て替え前の 2005 年撮影

この梅田吸気が『ブラック・ジャック』「アリの足」のラストシーンに登場します。小児麻痺の少年・光男が広島から大阪までの徒歩旅行の末、たどり着いたのがこの場所という設定。吸気塔の背後には、当時の阪急の社章がかけられた阪急ビルディング、阪急航空ビル、黒光りする富国生命ビルが描かれています。

この社章は「京阪神急行電鉄」を意味します。１９４３年～１９９２年まで使われていた阪急電鉄の社章。京都・大阪・神戸の市章を組み合わせたもので、阪神急行電鉄時代(１９１８年～４２年)は、外側の丸と内側の６つの三角はなく、京阪電気鉄道を合併する際に京都が加えられました。

大阪歴史博物館８階常設展の壁面写真より
阪急ビルのてっぺんには当時の阪急（京都線を合併する前の阪神急行電鉄）の社章。そのすぐ横の看板には「神戸の中心三宮へ特急 25 分」のキャッチコピーが見える。

当時の阪急百貨店大食堂のライスカレー再現
お皿は阪急百貨店の社章。阪神急行電鉄時代の電鉄と百貨店は同様の社章が使用され、阪急電鉄が京阪電鉄を合併後も百貨店ではこちらの社章が継承された。

◎『アドルフに告ぐ』で描かれた阪急電車

ドラマ「経世済民の男　小林一三」では、阪急電鉄の神戸線開業をめぐって、ライバル阪神電鉄との熾烈な競争が描かれていました。昭和５（１９３０）年、阪神間を最短時分で結ぶ、神戸線の特急車両９００系が登場します。９００～９１９の20両が製造され、昭和53（１９７８）年まで運行されていました。

現在保存されている 900 系車両
阪急正雀工場の鉄道イベントの体験運転の際に筆者の弟・高坂史章が撮影。前１両のみ。

阪急の正雀工場には９００系の車両が復元保存されており、年に２回程度開催される鉄道イベントの際には乗車することもできます。

実はこの９００系が、『アドルフに告ぐ』に描かれています。峠草平は、仁川警部とともに小城先生宅へ向かいます。「じゃあ、その小城先生いう教師の家へ行ってみよか」という台詞と共に描かれているのは戸線を走る９００系で間違いないでしょう。

阪神急行電鉄 900 系鉄道模型
（阪急百貨店で開催の特別展「小林一三ワールド」にて撮影）

昭和10年代の阪神間を舞台にした『アドルフに告ぐ』には、こうした時代背景がリアルに描き込まれています。

また曽根崎警察署から仮釈放された峠草平が仁川警部とともに梅田駅に向かうシーンで阪急ビルが描かれています。仁川警部の「なーに、電車ン乗って二つほどむこうの駅やさかい」という台詞から、仁川邸は手塚治虫の母校・北野中学のあった十三あたりに設定していると思われます。

◎むすびにかえて

「駅の乗降場」という日常の公共空間こそ豪華にした梅田の阪急ビルディングは、ある意味「経世済民の男　小林一三」の思想であったと思うのです。優美なアーチ型の梅田駅コンコースの「灯り」に終戦の喜びを感じたという手塚治虫のエピソードは、実は阪急文化への潜在的な憧れだったのかもしれません。

『アドルフに告ぐ』より
大阪の仁川警部の自宅より神戸の小城先生のアパートに向かうシーンで描かれている阪急電車は、当時神戸線を走っていた900系車両。

©手塚プロダクション

『アドルフに告ぐ』より
尾行するランプの部下の車の向こうには、阪急梅田駅に向かう峠草平と仁川警部。

©手塚プロダクション

阪急ビル全景

（南東方向より。写真提供：中尾嘉孝氏）